

平成 29 年 8 月 25 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370416

研究課題名(和文) 日韓における中国近現代文学受容の比較研究

研究課題名(英文) Lirative studies on the Modern Chinese literature in Japan and Korea

研究代表者

小川 利康 (OGAWA, Toshiyasu)

早稲田大学・商学大学院・教授

研究者番号：70233418

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は中国近現代文学が日韓において、どのように受容されてきたかを探る研究である。時期ごとに異なる文学作品受容の諸相を明らかにするため、韓国の研究機関と提携し、国際的共同研究を行った。

2014年度は12月19、20日に早稲田大学でシンポジウムを開催し、日韓それぞれ20名の研究者が討議に参加した。2016年度は12月27日、28日に韓国梨花女子大でシンポジウムが開催され、日韓双方20名の研究者が討議に参加した。次回は2018年度に東京大学(駒場)でシンポジウムを開催することを目標に共同研究を継続する。

研究成果の概要(英文)：This research is a study to find out how modern Chinese contemporary literature has been accepted in Japan and Korea. In order to clarify various aspects of acceptance of literary works by different times, we collaborated with Korean research institutes and conducted international collaborative research.

In FY 2014, a symposium was held at Waseda University on December 19 and 20, and 20 researchers in each of Japan and South Korea participated in the discussion. A symposium was held at Ewha Women's University in Korea on December 27 and 28, and 20 researchers from both Japan and South Korea participated in the discussion. Next time we will continue joint research with the goal of holding a symposium at the University of Tokyo (Komaba) in FY 2018.

研究分野：中国現代文学

キーワード：中国現代文学

1. 研究開始当初の背景

近年の中国近現代文学研究における顕著な傾向として、研究領域のボーダレス化が進んでいる。一つには作家・作品の越境であり、中国大陸から広く海外に活躍の場を求める作家が増えている。その筆頭には、ノーベル文学賞受賞者・高行健（在仏）が挙げられるが、近年でも嚴歌苓（在豪）、陳謙、袁勁梅（ともに在米）など様々な作家が中国語で文学活動を続けている。またいま一つには、研究者の越境である。水準の高い研究論文が中国大陸だけでなく、台湾・香港・シンガポール・アメリカ、さらには韓国から陸続と発表され、まことに応接の暇がない。

この現状を鑑みるに、いまや中国近現代文学を無前提に中国大陸に限定できない。これに代わって「中文文学」（中国語文学）という新たな枠組みが生まれつつある。その枠組みを体現する形で、藤井省三は近著『中国語圏文学史』（東京大学出版会 2011 年）を上梓し、香港・台湾文学も文学史叙述の射程に入れ、東アジア全体に広がる文学史を構想している。その中で藤井も指摘するように、20 世紀以降の「中文文学」の歴史は国家地域を越境した東西古今の文化潮流が渦巻くなかで形成されたもので、まさしく越境の歴史である。そこに遺された文学的営為の解明にも国家地域を越えた広い視野が必要である。そこで顧みれば、日本における中国近現代文学研究は戦前・前後を通じて重厚な研究の蓄積があり、中国でも高い評価を得てきたが、日中二国間の比較対照に縛られすぎ、東アジアの重層的影響関係に対する目配りが不足していたことは否めない。

如上の観点から、国際会議「東アジアにおける魯迅研究」（1999 年 12 月、東京大学）は新たな可能性を見いだす試みと言えるだろう。中国・台湾・香港・韓国・シンガポールから招かれた研究者が一堂に会し、各国における魯迅研究の現状と課題を切り口に、魯迅の文学テキスト読解に新たな地平を切り拓いた。この会議において、金時俊氏（ソウル大学）は魯迅の植民地朝鮮への関心を指摘しつつ、北京大学に留学した独立運動家・丁来東もまた『朝鮮日報』紙上で魯迅を論じているとして、日本の侵略支配下にあった中国と朝鮮の間には相互交流が存在したことを明らかにした。このような文学の享受・流通の有り様は、日本の研究では見落されがちであり、改めて東アジア各国間相互の影響関係が重層的であることが明らかになった。更にこの試みを礎石として、ともに外国語としての「中文文学」を研究する立場から、日本と韓国の研究者が中心となってワークショップ「日韓中国現代文学対話会」（2006 年 6 月、東京大学）が開催された。韓国側からはソウル大学、韓国外国語大学、高麗大学、梨花女子大学の研究者が参加し、日本側からは東京大学、日本大学、慶應義塾大学、中央大学、早稲田大学の研究者が参加した。発表者は一

部を除き、中国語で発表討論を行った。このワークショップは現在までに第 2 回（2008 年 7 月、ソウル大学）、第 3 回（2010 年 11 月、慶應義塾大学）、第 4 回（2012 年 12 月、高麗大学）と 2 年に一回のペースで開催し、日韓双方で互いの異なる視点からの研究に大変刺激を受け、大きな研究成果を上げてきた。

2. 研究の目的

本研究は 20 世紀の中国近現代文学が日本と韓国において、どのように受容されてきたかを探る多面的かつ重層的な研究である。中国近現代文学の作品は、時期によって日韓における受容のあり方は大きく異なる。その受容の差異には、日本による植民地支配と韓国民衆の抵抗運動という大きな歴史的脈だけでなく、この近代化のプロセスには、救亡独立運動、そして欧米日本から近代思想を吸収する啓蒙運動が矛盾を孕みつつも並存していた。その複雑な諸相を明らかにするため、韓国を代表する研究機関と全面的に提携し、国際的共同研究を継続的に展開する。

3. 研究の方法

本研究は 3 年計画とする。1 年目の平成 26 年度は、早稲田大学で「日韓中国現代文学対話会」を開催し、韓国から研究者を招聘し、日韓における中国近現代文学の受容について討議を行う。同時に、次年度以降の共同研究への準備に必要な討議を行い、作業目標を定める。メンバーは作業目標に基づき、資料収集並びに共同研究に取り組む。2 年目の平成 27 年度は、1 年目の協議に基づいて、日韓双方による共同研究を進め、データベース作成に取り組む。研究代表者は北京現代文学館を訪問し、周作人遺族（周吉宜副館長）から聞き取り調査を行う。3 年目の平成 28 年度は、韓国での開催年にあたり、日本側研究者が韓国を 11 月頃訪問し、2 年目に準備したテーマに基づいて発表討論を行う。三年目には三年間の成果を集成する形で日韓共同の論文集を刊行し、海外向けに電子版を作成し、ウェブ上でも公開する。

4. 研究成果

2014 年度は当初の計画通り、日韓双方において（1）「魯迅を中心とする近現代文学作品の伝播と受容」、（2）「日韓における中国同時代文学・映画の翻訳と受容」を主要論題として、論文を募集した。採択された論文は『2014 東京ソウル中国現代文学研究対話会論文集』にまとめられ、12 月に刊行された。この刊行に合わせ、12 月 19 日、20 日両日にわたり、早稲田大学 11 号館において日韓双方の論文を発表、討議するシンポジウムを開催し、極めて稔り多い学術交流を実現できた。

今回の共同研究には、韓国側から、ソウル大学、韓国外国語大学、高麗大学、梨花女子大学の参加を得て、日本側からは東京大学、

日本大学、慶應義塾大学、中央大学ならびに早稲田大学を幹事校として、日本国内の研究者の協力を得ながら、共同研究を進めた。上記第1テーマに関しては、小川、長堀祐造（慶應義塾大学、科研共同研究者）が中心となり、第2テーマに関しては、藤井省三（東京大学）、山口守（日本大学）、飯塚容（中央大学）が中心となり、全体の統括を小川が行い、中村みどり（当時早稲田大学、現在神奈川大学）が補佐した。

日韓共同研究は、2006年6月に第1回の共同ワークショップを開催して以来の提携関係を基礎としており、双方とも10年来の信頼関係によって、研究指導に当たる教員から若手院生まで活発な交流が実現できた。なかでも早稲田大学大学院文学研究科出身で高麗大学教授となっている白永吉氏の支援により、2014年12月22日には山口守が、2015年2月10日には小川が高麗大学に招かれて招待講演を行うなど、論文集によるシンポジウムの後も継続的な交流が図られており、昨今の日韓関係が低調ななかで自負するに足る成果であると考えられる。

二年目の2015年度は韓国側研究者との連携を維持しつつ、個々のメンバーがそれぞれ個別の研究テーマの進展を図った。小川利康は、引き続き魯迅、周作人研究を行い、その成果を台湾慈濟大学での国際シンポジウム、中国魯迅学会、台湾政治大学での東アジア現代中文文学国際シンポジウムで発表した。特に東アジア現代中文文学国際シンポジウムには昨年度の日韓ワークショップで共同研究を進めた朴宰雨、洪昔杓教授らとも一堂に会し、来年度2016年度に韓国で開催する時期ワークショップの打ち合わせも行うことが出来て、有意義なものであった。山口守は既成の中国文学の枠組みを超え、漢語もしくは華語という広い意味での中国語を共有しつつも、新たなアイデンティティの在処から新しい文学作品を創造する可能性を提示し、その具体例として台湾パイワン族作家リカラッ・アウーや中国チベット人作家アーライ（阿来）の研究を進めている。また、慶應義塾大学文学部創設125周年記念行事の一環として行った講演「交差する眼差し：巴金と芹沢光治良」は長年にわたる巴金研究の成果の一部である。長堀祐造は魯迅、陳独秀研究を行い、その成果として著書「陳独秀——反骨の志士、近代中国の指導者」（山川出版社）を刊行したほか、論文「魯迅『狂人日記』材源考—周氏兄弟とソログープ」を発表した。飯塚容は演劇（文明戯）研究と当代文学研究を行った。また、自ら主編として中国の外文出版社より中国当代文学作品を翻訳紹介する文芸誌『灯火』を刊行したことは特記に値する。中村みどりは陶晶孫研究、ジャポニズム研究を行い、「戦争下の記録と故事：陶晶孫發表於《新申報》的作品」が『資料と阐释』（2016年代4期、復旦大学）に採択された。

最終年度の2016年度は韓国側が主催する

日韓ワークショップが梨花女子大学で12月27、28日に開催された。このワークショップ開催に先立ち、三年間の研究成果を結集する論文集が共同研究の成果として結実し、12月に首尾よく刊行することができた。

さらに個々の研究成果としても、最終年度にふさわしく、多くの研究成果が発表された。小川利康は、引き続き周作人を中心とする研究活動を進めた。その成果として「周氏兄弟と東京——兄弟之間文化体験的差異」（『中国現代文学研究叢刊』2016年7期）では魯迅と周作人の日本での生活体験に差異を見出し、その差異が後年の文学活動に及ぼした影響について論じ、「周作人と小詩運動」（『現代中文学刊（双月刊）』2016年第4期）では、周作人が日本俳句や短歌から学んだ簡潔性と暗示効果を中国の新詩改革運動に活かそうと試みた経緯について論じた。日本語の論文としては「周氏兄弟における「江戸」と「東京」——明治末期の日本文化体験」（『文化論集』48・49合併号、2016年9月）のほか「周作人・松枝茂夫往来書簡 補遺編」（『文化論集』50号、2017年3月）を発表した。「周作人と江戸川柳」（『野草』98号、2016年10月）では、周作人が晩年まで猥褻性の強い江戸川柳を愛好したのは中国に根強く残る儒教的禁欲主義に対する反発からであることを明らかにした。山口守は「巴金と高德曼」において、一九二〇年代における無名時代の巴金のアナキズムをエマ・ゴールドマン（Emma Goldman）との書簡を手がかりに解明するものであった。また、講演「張我軍と『東洋平和の道』及び大東亜文学者大会」（於大妻女子大学、2016年12月17日）はいままで研究されていなかった北京時代の張我軍に関するもので、北京大学で日本語教育に従事していた当時の状況などを明らかにする貴重なものであった。長堀祐造は東洋文庫より『陳独秀文集』（全三巻）の翻訳を完成させた。長年にわたり、正当な評価を受けることがなく、その思想的全貌を窺うに足る邦訳も存在しなかったが、今回の翻訳はその研究上の空白を埋めるものである。小川利康も第一巻の翻訳に参加した。長堀祐造は翻訳の完成を記念する形で神奈川大学、法政大学などで陳独秀に関する講演を行っている。飯塚容は第四回漢学家文学翻訳国際研討会（中国長春市）に招かれ、三十年來の当代文学翻訳の経験を踏まえ、「翻訳の限界をいかに乗り越えるか」について講演を行った。「多数を占めた改編作品、翻訳作品」は近年の中国演劇の動向をレビューするものであった。中村みどりは引き続き陶晶孫研究を行い、日本留学時代の音楽活動を調査して「大学オーケストラから左翼演劇へ」（『人文研究』神奈川大学191号、2017年3月）を発表したほか、「淪陥上海的叙述と故事——陶晶孫的文学陣地」（『史料と阐释』2016年9月）、「蝴蝶夫人」——從好萊塢電影到施蛰存与穆時英的小説（『現代中文学刊』2016年5月）と

二本の中国語論文が権威ある研究誌に採択された。

三年間にわたる日韓の共同研究を総じて見れば、外国文学研究としての中国文学研究に関するネットワークの形成と拡大に大きく寄与したといえよう。本研究を通じて、従来は2年に一度の開催準備期間だけ、点と点を結ぶ協力関係に過ぎなかったものを、3年間の研究期間を設定することで、テーマごとに研究分担者が韓国側と研究グループを形成して、連携した研究体制が確立できるようになった。

昨今は日中間での連携は日常的な研究活動の一部だが、韓国の研究機関との連携はほかに例を見ないもので、その協力関係をより確かなものとする事ができた。韓国では、中国との経済関係強化が進んでいる背景もあって、大学院への進学者も多く、教員を中心とする研究者の層も日本より遥かに厚く、研究水準は日増しに向上している。とりわけソウル大学、韓国外国語大学、高麗大学、梨花女子大学などのトップレベルの大学は研究交流を通して食欲に吸収成長せんとする意欲が旺盛であり、日本側の若手の研究者は良い刺激を受けたと思う。ただし、もう一方で近現代における日中韓三者相互の影響関係を論じる時、日本が過去に蓄積してきた史料面、研究面でのアドバンテージは一朝一夕で揺らぐものではなく、今後も二〇世紀文学に関する研究では日本が指導的な役割を果たすことが可能であるし、それは歴史的使命でもある。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 36 件)

- (1) 小川利康、「周氏兄弟与大逆事件」、『社会科学輯刊』2017年3号(採用決定、校正済) 査読有
- (2) 小川利康、「周作人・松枝茂夫往来書簡 補遺」、『文化論集』第50号、2017年(PP.1-18) 査読なし
- (3) 小川利康、「周氏兄弟における「江戸」と「東京」——明治末期の日本文化体験」、『文化論集』第48・49合併号2016年、(PP.45-71) 査読なし
- (4) 小川利康、「周作人と江戸川柳」、『野草』第98号、2016年(PP.19-41) 査読有
- (5) 小川利康、「周作人与小詩運動」、『現代中文学刊(双月刊)』2016年4号、(PP.60-68) 査読有
- (6) 小川利康、「周作人与江戸川柳——作為反礼教主義的猥褻論」、『魯迅研究月刊』2016年第3期(PP.59-70) 査読有
- (7) 小川利康、「周氏兄弟与東京——兄弟之間文化体験的差異」、『中国現代文学研究叢刊』2016年7号、(PP.92-107) 査読有
- (8) 小川利康、「解説(二言語・文化諸作について)」、長堀祐造・小川利康・小野寺史郎・竹元則人編訳『陳独秀文集1 初期思想・言語文化卷』平凡社東洋文庫 872、2016年(PP.363-376) 査読なし
- (9) 小川利康、「廢名《橋》裡の小説方法論——兼論厨川白村の影響」、『現代中文文学学報』(香港嶺南大学)「文学中的流轉」專號(2015 夏)12卷2期、(PP.13-26) 査読有
- (10) 小川利康、「周氏兄弟的散文詩」、『中山大学学報(社科版)』55卷、2015年01月(PP.1-10)、査読有
- (11) 山口守、「巴金与高德曼:1920年代国民革命中的無政府主義」、『中国現代文学研究叢刊』第5期、2016年(PP.1-21) 査読有
- (12) 山口守、「白先勇小説中的現代主義:《台北人》的記憶与郷愁」、『重返現代』麦田出版、2016年(PP.365-383) 査読なし
- (13) 山口守、「主體—母語—寫作:超越本質主義」、『利格拉樂·阿鳥·祖靈遺忘的孩子序二』、台北前衛出版社2015年(PP.15-21) 査読なし
- (14) 山口守、「中国文字の本質主義を超えて——漢語文学・華語語系文学の可能性」、『中国——社会と文化』第30号、2015年(PP.18-44) 査読有
- (15) 山口守、「從雜誌《平等》看無政府主義思想空間的越境性——以巴金与劉忠士的書簡為中心」、『現代中文学刊』、2014年5卷(PP.30-38) 査読有
- (16) 山口守、「作為離散的母語:阿来的漢語文学」、『阿来研究(1)』、2014年1卷(PP.148-159) 査読有
- (17) 長堀祐造、「魯迅とゾルゲとの距離——表象としてのスパイ及び「上海文芸の一瞥」講演の謎」、関根謙編『表象の中の近代中国』平凡社2016年(P.P.184-223) 査読なし
- (18) 長堀祐造、「巴金と晩年魯迅に関する走り書き的覚書——胡愈之・吳克剛」、『三田文学』に触れて」、『藝文研究』(慶應義塾大学藝文学会)第111号、2016年(PP.1-18) 査読なし
- (19) 長堀祐造、翻訳「陳道同著「何之瑜の二つのこと」」、『日吉紀要・中国研究』第9号2016年(PP.121-169) 査読なし
- (20) 長堀祐造、「陳独秀略伝」、長堀祐造・小川利康・小野寺史郎・竹元則人編訳『陳独秀文集1 初期思想・言語文化卷』平凡社東洋文庫 872、2016年、(P.P.17-30) 査読なし
- (21) 長堀祐造、「魯迅『狂人日記』材源考——周氏兄弟とソログープ」、『現代の日本に於ける魯迅研究』九州大学大学院言語文化研究院2016年(PP.54-76) 査読なし
- (22) 飯塚容、「多数を占めた改編作品、翻訳作品」、『國際演劇年鑑2017』國際演劇協会、2017年1卷(PP.2-12) 査読なし
- (23) 飯塚容、「上海話劇センター20周年、抗日戦争勝利70周年など」、『國際演劇年鑑2016』國際演劇協会2016年(PP.16-23) 査読なし
- (24) 飯塚容、「孟冰とその劇作について」、『中国現代戯曲集10 孟冰作品集』晚成書房2016年(PP.388-394) 査読なし

- (25) 飯塚容「シェイクスピア生誕 450 周年、『雷雨』発表 80 周年の記念上演など」、『国際演劇年鑑 2015』国際演劇協会、2015 年 1 巻、PP.16-23 査読なし
- (26) 飯塚容、翻訳・李浩「おじいさんの負債」、『灯火』中国外文出版社 2015 年(PP.94-113) 査読なし
- (27) 飯塚容、「文明戯劇本的六種類型」、『新潮演劇と新劇の発生』、学苑出版社 2015 年 (PP.263-278) 査読なし
- (28) 飯塚容、「關於錢谷融的“《雷雨》人物談”」、『曹禺研究』長江出版社 2015 年 (PP.120-134) 査読有
- (29) 飯塚容、『雷雨』在日本、『雷雨八十年』(天津古籍出版社)、2014 年 1 巻 (PP.167-177) 査読なし
- (30) 中村みどり、「大学オーケストラから左翼演劇へ—芸術劇社における陶晶孫の音楽活動—」、『人文研究』191 号(神奈川大学人文学会)、2017 年 (PP.89-119) 査読なし
- (31) 中村みどり、「《胡蝶夫人》—従好萊塢電影到施蛰存与穆世英的小説」、『現代中文學刊(双月刊)』2016 年 5 号、2016 年 (PP.70-77) 査読有
- (32) 中村みどり、「論評」趙敏氏郁達夫における芥川龍之介の受容—歴史小説『採石磯』と『戯作三昧』、『地獄変』の比較から—、『野草』第 97 号 2016 年(PP.137-140) 査読なし
- (33) 中村みどり、「淪陥上海的叙述与故事—陶晶孫的文学陣地』、『資料与闡釈』第 4 期、2016 年 (PP.305-317) 査読有
- (34) 中村みどり、「陶晶孫の日本留学と医学への道—陶烈、佐藤みさをとの交流から」、大里浩秋ほか編『近現代中国人日本留学の諸相—「管理」と「交流」を中心に』、2015 年 (PP.327-356) 査読なし
- (35) 中村みどり、「戦争下の記録与故事 陶晶孫發表於《新申報》的作品』、『2014 東京・首爾中国現代文学研究対話会論文集』、2014 年 (PP.124-132) 査読なし
- (36) 中村みどり、「第九章美術水墨画からアバンギャルドまで』、『ドラゴン解剖学 中国現代文化 14 講』、2014 年 (PP.88-96) 査読なし
- [学会発表] (計 29 件)
- (1) 小川利康、「周氏兄弟与安德烈耶夫」、『2016 魯迅文科論壇国際学術研討会』、中国人民大学 2016 年 9 月 24 日
- (2) 小川利康、「界于文白之間—從『小河』到『老虎橋雜詩』」、現当中国文学語言問題国際学術研討会、復旦大学(上海)、2016 年 04 月 29 日
- (3) 小川利康、「周氏兄弟與日本文学的關係」、国際会議「中國・日本の文化 DNA とその進化」(中国・日本の文化的 DNA とその進化)於：韓国高麗大学、招待有り、2015 年 2 月 10 日
- (4) 山口守、「張我軍と『東洋平和の道』及び大東亜文学者大会」大妻女子大学草稿テキスト研究所第 8 回シンポジウム「戦争・アジア・検閲—1940 年代の文化と政治」、大妻女子大学文学部 2016 年 12 月 17 日
- (5) 山口守、「アフター・バベル：華語語系 Sinophone からエクソフォン Exophone まで」、日本大学国文学会シンポジウム「多和田葉子と言葉のざわめき」、日本大学文理学部 2016 年 10 月 22 日
- (6) 山口守、「巴金対山川均的批判：対話是否可能?」、第 12 届巴金学術研討会、河北師範大学文学院、2016 年 9 月 24 日
- (7) 山口守、「華語語系 Sinophone 到母語之外 Exophone:以黄錦樹、利格拉樂·阿烏和阿來為例」、華文文学与中華文化国際学術研討会、南京大学文學院 2016 年 8 月 26 日
- (8) 山口守、「賈植芳先生的日本經驗与魯迅」、賈植芳与中国新文学傳承国際学術研討会、中国：河西学院(甘肅省張掖市)、2016 年 7 月 2 日
- (9) 山口守、「超越作為範例的中国文学概念：以華語語系文学与漢語文学為視覚」、「東方学学科建構与中日韓印阿文学の関連学術研討会—及中国東方文学研究会第十五届年会」、広東外語外貿大学、2015 年 11 月 29 日
- (10) 山口守、「超越本質主義：漢語文学華語語系文学如何可能」、「当代漢語文学概念与思潮国際学術研討会」、立教大学 2015 年 11 月 20 日
- (11) 山口守、「北京時期：痛苦的／張我軍／的痛苦」、「在地与易地—第十一届東亜学者現代中文文学国際学術研討会」、台湾国立政治大学台湾文学研究所、2015 年 11 月 13 日
- (12) 山口守、「交差する眼差し：巴金と芹沢光治良」、「巴金展記念シンポジウム(招待講演)、慶應義塾大学 2015 年 9 月 5 日
- (13) 山口守、「パラダイムとしての中国文学の限界：漢語文学華語語系文学の視点から」、高麗大学—日本大学文理学部共同学術会議、韓国高麗大学、2014 年 12 月 23 日
- (14) 山口守、「『中国行きのスロウ・ボート』旅としての“中国”」、「村上春樹と中国」国際シンポジウム、中国上海杉達大学外語学部日本語学部・日本文化研究所、2014 年 12 月 6 日
- (15) 山口守、「パラダイムとしての中国文学の限界漢語文学華語語系文学の視点から」、中国社会文化学会、東京大学東洋文化研究所、2014 年 7 月 6 日
- (16) 長堀祐造、招待講演「私と莫言・翻訳と取材経験から—『変』翻訳を中心に」、莫言講演集出版記念講演会、東京大学山上会館 2016 年 7 月 30 日
- (17) 長堀祐造、招待講演「生涯にわたる反対派」陳独秀(1879 - 1942)、国際労働問題研究会、法政大学 80 年記念棟 2016 年 7 月 2 日
- (18) 長堀祐造、「魯迅の文芸観と運動として

の文学、そして宣伝」、慶應義塾大学藝文学会シンポジウム「戦争と文学」慶應義塾大学三田キャンパス北館ホール 2016年12月16日

- (19) 長堀祐造、「上海文芸の一瞥」テキスト問題について・ノート—魯迅・ゾルゲ・東亜同文書院にふれて」、愛知大学孔子学院創立10周年記念シンポジウム「日中近代比較文学研究の空間と可能性(1900-2010)」、愛知大学車道キャンパス 2016年8月2日
- (20) 長堀祐造、「魯迅とゾルゲ」、慶應義塾大学日吉現代文学研究会、慶應義塾大学日吉キャンパス、2015年3月7日
- (21) 飯塚容、「翻訳の限界をいかに乗り越えるか」、第4回漢学家文学翻訳国際研討会、長春松苑賓館、2016年8月15日
- (22) 飯塚容、「日本戦後復興期对中国現代文学的伝播与接受」、「在地与易地—第十一届東亜学者現代中文文学国際學術研討会」、台湾国立政治大学台湾文学研究所、2015年11月13日
- (23) 中村みどり、「跨華界与租界的文化活動—陶晶孫在上海芸術劇社的活動」、「上海都市文化歴史演進暨蘭心大戲院150周年国際學術討論会」、上海社会科学院 2016年8月27日
- (24) 中村みどり、「東亜医学院と日本—陶晶孫の足跡を中心として」、留学生史研究会、神奈川大学 2015年10月3日
- (25) 中村みどり、「陶晶孫『青島一瞥』の背景」、科研費基盤研究C「文化都市青島における知識人ネットワークと都市表象の研究」、近畿大学 2015年6月27日
- (26) 中村みどり、『野草』第96号合評：趙敏氏郁達夫における芥川龍之介の受容—歴史小説『採石磯』と『戯作三昧』、『地獄変』の比較から—、中国文芸研究会、関西学院大学 2015年9月27日
- (27) 中村みどり、「新たな時代の羅針盤を求めて—宋慶齡と近代中国の女性たち」、モダニズム研究会、国土館大学 2015年7月18日
- (28) 中村みどり、「陶晶孫『牛骨集』[楓林橋日記]を読む」、中国文芸研究会和歌山合宿、和歌山市加太淡嶋温泉大阪屋ひいな湯、2014年9月1日
- (29) 中村みどり、「20世紀20-30年代対日本形象的叙述—從留日作家到電影觀衆」、文学与思想：以20世紀中国文学为中心、中国華東師範大学、2014年6月14日

[図書] (計4件)

- (1) 長堀祐造、『世界史リブレット90 陳独秀』、山川出版社 2015年、95頁
- (2) 飯塚容、『中国話劇芸術史』第1巻、江蘇鳳凰教育出版社 2016年、第三編「曲折複雜的接受課程」執筆 (PP.221-369)、全488頁
- (3) 飯塚容、『中国の「新劇」と日本』、中央大学出版社、2014年、245頁

(4) 中村みどり、『中華文化スター列伝』、関西学院大学出版会 2016年、「4. 竜の子孫の巻「宋慶齡と近代中国の女性」」(PP.9-23)、全219頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小川 利康・早稲田大学商学学術院教授
(OGAWA Toshiyasu)

研究者番号：70233418

(2) 研究分担者

山口守・日本大学文理学部教授
(YAMAGUCHI Mamoru)

研究者番号：70210375

長堀 祐造・慶應義塾大学経済学部教授

(NAGAHORI Yuzo)

研究者番号：40208046

飯塚 容・中央大学文学部教授

(IIZUKA Yutori)

研究者番号：60151239

中村 みどり・神奈川大学外国語学部准教授

(NAKAMURA Midori)

研究者番号：30434351

(3) 連携研究者

三木直大・広島大学総合科学研究科教授

(MIKI Naotake)

研究者番号：10190612

池上貞子・跡見学園女子大学文学部コミュニケーション文化学科教授

(IKEGAMI Sadako)

研究者番号：10168114

以上